印欧語族の豊穣女神に共通する諸特徴について

沖田瑞穂

[キーワード ①印欧神話 ②豊穣女神 ③シュリー ④アプロディテ ⑤フレイヤ]

はじめに

インド・ヨーロッパ語族の比較神話研究は、ウィカンデル（S. Wikander）が発見しデュメジル（G. Dumézil）が発展させた方法論によって、新たな展望を手に入れることになった。その方法論について、吉田敦彦氏は以下のように説明されている。

ウィカンデルとデュメジルは、年代的にはリグヴェダよりずっと後代に成立したインドの大英雄叙事詩マハーバーラタに歌われた伝説が、いくつかの点ではヴェダ神話より一層古く、インド・イラン神話ないし

は印欧神話にまで遡る神話素の構造を、英雄伝説に転化しながら、きわめて正確な形で保持しているという事実を明らかにした。このウィカンデルとデュメジルによるマハーバーラタ研究の成果を、ローマ、ケルト、ゲルマンの英雄伝説や、オセットのナルト叙事詩などの領域において、デュメジルによってすでに獲得されている結果と照らし合わせて見る時に、われわれはさらに、一般に印欧語族の叙事詩伝説が古い神話の構造をしばしば驚くほど忠実に保存しているという状況を確認するのである。(1)

さらに吉田氏はこの成果をギリシャ神話にも援用し、トロヤ圏伝承が『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』などのインド叙事詩と同様に、印欧語族の共通伝承に遡る古い神話素を反映していることを明らかにされた。そしてこのことによって、デュメジルによってはほとんど閑却されていたギリシャ神話の領域が、印欧語族の比較神話研究の重要な資料となることを証明され、比較神話のための展望をさらに広げられた。

本稿ではこのような流れを踏まえて、インド・ギリシャ・北欧ゲルマンのそれぞれの神界を代表する美と豊穣の大女神である、シュリー、アプロディテ、フレイヤと、これらの女神の叙事詩における投影である女主人公たちを比較し、インド・ヨーロッパ語族に共通する豊穣女神の姿を再現することを試みる。

一、豊穣女神と水

ヒンドゥー教の神界を代表する美と豊穣の女神は、シュリー Śrī（ラクシュミー Lakṣmī）である。シュリー

は『ラーマーヤナ』やプラーナ諸文献以降にヴィシュヌ神妃としての地位を確立し、以来ヴィシュヌの性格を反映した妃神としての側面が強調されているが、元来彼女は独立した女神であった。ヴィシュヌと結び付けられるのは『マハーバーラタ』の新しい層以降においてである。シュリーという名は「幸福、繁栄」を意味するサンスクリット語であるが、彼女はもともと非アーリヤの豊穣女神であり、後にアーリヤの神界に取り入れられたものと思われる。シュリーが非アーリヤ女神であったことは、リグ・ヴェーダに属する「シュリー・スークタ」の記述から推測することができる。ここでは彼女は、泥（kardama, ciklīta）と共に住むことを祈願され、雌牛の糞の中に住まうと表現され、また象の声に喜ぶと言われている。泥の中に住むという観念は、最も古くからシュリーの象徴であるとされている蓮の花が、泥の中に咲くことに由来すると思われる。蓮、雌牛、象への信仰はいずれもインド独自のものであるので、シュリーはやはり元来は非アーリヤの女神であったのだろう。[2]

しかしシュリーは他方で、インド・ヨーロッパ的性質も持つことも指摘されている。シュリーは王権と深い関わりを持ち、王権を与えるという性質を有している。この点から、クラッペ（A. H. Krappe）、クマラスワミ（A. K. Coomaraswamy）、リース兄弟（A. Rees, B. Rees）、デュメジル、ヒルテバイテル（A. Hiltebeitel）らは、シュリーをアイルランドの女神などと比較し、彼女を印欧語族の「王権を与える女神」の系譜に属するものとみなす。[3]

シュリーに関する最も代表的な神話は、乳海からの誕生の神話である。この神話は様々な文献に記されているが、ここでは『マハーバーラタ』に挿話として記されているものを取り上げる。

ある時神々は不死の飲料アムリタを得たいと願った。そこでブラフマーとナーラーヤナ（ヴィシュヌ）は竜王アナンタに命じて海中にマンダラ山を運ばせ、亀の王アクーパーラを支点にして、大蛇ヴァースキ竜王をその山に巻きつけ、両端を神々とアスラとで引っ張って大山をまわし、大海を攪拌しはじめた。このとき山から流出した樹液や黄金などによって海は乳海になり、神々は不死になったが、アムリタは生じなかった。神々はヴィシュヌに助けを求めた。ヴィシュヌはこの仕事に携わる全てのものに力を与えた。神々とアスラが再び乳海を攪拌すると、大海から太陽と月、シュリー女神、酒の女神、白馬、宝珠カウストゥバが生じた。カウストゥバは聖ナーラーヤナの胸にある。シュリー、酒の女神、月、そして思考のように早い馬は、太陽の道に従って、神々がいるところに行った。最後にアムリタの入った白い壺を持った神々の医師ダヌヴァンタリが、乳海から出現した。アスラたちはアムリタを独占しようと企てた。しかし美女に変身したヴィシュヌが、アスラたちからアムリタを奪い返した。（以下で日食月食の起源が語られる。）神々とアスラの間に戦いが始まった。ナラとナーラーヤナの働きによって神々は勝利し、アムリタを安全な場所に隠し、その守護をインドラ神にゆだねた。[4]

切り取ってきた山を海に入れてかき混ぜるという表現は、性交を暗示している。吉田敦彦氏がすでに指摘されているように、[5] この乳海攪拌の神話は、ヘシオドスの『神統記』に記されている、アプロディテの誕生の神話と比較することができる。

クロノスはウラノスの陽根をアダマスによって切り取って、陸から波のうねる海中に投げ入れた。それは長い間、海の至るところをさまよった。するとその周りに、白い泡が不死の肉から生じた。そしてその中で一人の乙女が育った。最初に彼女は、いとも神聖なキュテラに近づいた。そしてそこから、水に囲まれたキュプロスに至った。畏こく美しい女神が歩くと、その周りに、柔らかな足の下で草が育つのだった。彼女をアプロディテと、（そしてまた、泡から生じた女神、花冠をつけたキュテレイアと、）神々と人間たちは呼んでいる。泡の中で育ったために。[6]

クロノスによって切り落とされたウラノスの陽根が、海に落ち、そこから泡が生じ、その中からアプロディテが誕生した。すなわち、「切り取られた男根が海に落ち、そこから美と豊穣の女神が誕生した」という神話が、インドとギリシャにおいて、それぞれの形で表現されていると考えることができる。

この二女神には、海からの誕生という神話の他にも、水との関わりが認められる。シュリーは「ガジャ・ラクシュミー」と呼ばれる形で図像に表されることが多い。池の中央に坐すシュリーの四方に象がいて、この象たちが鼻で支えた水瓶からシュリーに水を注いでいるという図である。また、象はサンスクリット語でナーガ（nāga）と言うが、この語は同時に蛇（特にコブラ）をも表す。ジャイスワル（S. Jaiswal）によれば、仏教伝承では、シュリーは蛇の王であるサーガラ（海）の娘と考えられている。[7]

アプロディテは航海の守護神でもあり、神殿が海辺に建てられることが多かった。『ギリシア詞華集』に

は、航海の安全をアプロディテに祈る詩が記されている。[8]

北欧ゲルマンの美と豊穣の女神フレイヤもまた、水界との関連を有する。彼女はニョルズの娘とされているが、このニョルズは豊穣神であると共に航海の守護神でもあり、風と海の神である。彼の住処は海の側にあるとも言われている。つまりニョルズには海神としての一面が見られ、その娘であるフレイヤもまた、海からの誕生という神話こそ語られていないものの、シュリーやアプロディテと同様に「海の娘」であると考えることができる。

二、豊穣女神の浮気な性質

シュリーは多くの神話の中で、その浮気な性質を強調されている。例えば『マハーバーラタ』には、次のような神話が語られている。

ある時シュリーは美しい女の姿をして、雌牛の群の中に入っていった。雌牛たちは彼女に、あなたは誰ですかと問うた。シュリーは言った。「私は人々に愛される、シュリーという名で知られている者です。私に捨てられて、ダイティヤ（悪魔）たちは永遠に敗北してしまいました。インドラ、ヴィヴァスヴァット、ソーマ、ヴィシュヌ、ヴァルナ、アグニ神たちは、私を得て繁栄しています。聖仙たちも神々も同様です。私が嫌う者は完全に滅びます。その者たちは法、実利、愛欲を失った、不幸な者となります。雌牛たちよ、

私はあなた方の中にいつも住むことを望みます」。雌牛たちはこれに答えて言った。「あなたは移り気で、落ち着きがなく、多くの者によって共有される。それゆえ我々は、あなたを得ることを望みません」[9]。

ここでシュリー自身が述べているように、ヴィシュヌ神妃の地位を確立する以前は、彼女は様々な男神と関係していた。シュリーのこのような性質は多くの文献から知ることができる。ゴンダ（J. Gonda）によれば[10]、シュリーと関係を有していた男神のひとりは、クベーラである。『マハーバーラタ』2, 10, 19では彼の宮殿にシュリーが住んでいると記されている。また『ナーラダ・プラーナ』84, 12では、シュリーはクベーラの妻とされている。他に、『マハーバーラタ』1, 66, 13や『ヴィシュヌ・プラーナ』1, 7, 21では、ダルマの妻とされている。さらに彼女は、インドラと特に深い関係を有する。『マハーバーラタ』12, 228, 82には、シュリーはかつてアスラと共にいたが、彼らを棄ててインドラのもとに行った、という神話が語られている。またジャイスワルは、軍神カールッティケーヤ（スカンダ）とシュリーとの関係を指摘している[11]。

アプロディテにも、男神たちや人間の男性との関係が多く語られている。ホメロスの『オデュッセイア』8, 266-366によれば、アプロディテは醜い鍛冶の神ヘパイストスを夫とし、アレスを愛人としている。

ある時ヘパイストスは太陽神の告げ口で、アプロディテの不義を知った。そこで彼は神々の目によっても見ることの出来ない網を作り、寝間にそっと仕掛けた上で、仕事場に出かけていった。夫の留守にアプロディテが愛人アレスを呼び出し、彼と共に寝台に腰掛けると、ヘパイストスの仕掛けた網にかかってし

まった。帰ってきたヘパイストスはこれを見て怒りに震えながら、オリュンポスの神々を証人に集めた。神々は網の中でもがく二人を見て、大いに笑った。[12]

『神統記』933-937には、アプロディテとアレスの間に、ポボス、デイモス、ハルモニアの三子が生まれたと記されている。しかしアプロディテはこのアレスの他に、絶世の美青年の神アドニスを愛人としていた。アドニスは狩の最中に猪によって殺されたとされているが、この猪はアドニスに嫉妬したアレスが仕掛けたものとも、アレス自身であるとも言われている。曙の女神エオスの血筋を引くパエトンも、まだ幼い少年の時にアプロディテに愛され、彼女によって中空に運ばれ、神殿の殿守とされたという。[13]『ホメロス風讃歌』の「アプロディテへの讃歌」には、アンキセスと関係を持ったことが述べられている。アプロディテは一目でアンキセスに恋をした。そして人間に身を変えて彼と交わり、息子を産んだ。この子がトロイアの英雄で、ローマ人の祖とされるアイネイアスである。[14]

このようにアプロディテには様々な恋物語が語られており、美と愛の女神にふさわしい浮気な性質を看取することができる。

「浮気な美と豊穣の女神」という点でも、シュリーやアプロディテの性質は北欧神話のフレイヤに通じる。『古エッダ』の「ロカセンナ」に語られるところによると、神々の間で宴会が催された時、フレイヤはロキに、彼女がその場にいる全ての神々と小人たちの愛人であること、さらには兄弟のフレイとまで関係を持ったことを、次のように罵られている。

だまれ、フレイヤよ、私はあんたのことはすっかり承知だ。あんたは不品行にことかかぬ、この場におられるアースとアールヴのだれもがあんたの愛人だった。だまれ、フレイヤよ、あんたは悪意に満ちみちた魔法で害なす女だ。あんたが自分の兄弟といるところに、心やさしき神々が踏みこみ、その時フレイヤよ、あんたは屁をひっこいた。[15]

また、フレイヤが黄金の首飾りを手に入れるために四人の小人と交わったという、次のような神話がある。

アースガルズのオーディンの館の近くに、四人のドヴェルグ（こびと）たちが住んでいた。彼らは巧みな工匠であった。ある時フレイヤが彼らの住処の近くにやってきて、ドヴェルグたちの作っている、ほとんど完成している黄金の首飾りを見た。フレイヤはどうしてもそれが欲しくなり、金銀やその他の宝石でその首飾りを買いたいと言った。ドヴェルグたちは、フレイヤが自分たちの一人一人と一晩ずつ寝るなら、この首飾りを渡そうと言った。彼女はこれに応じた。そして四夜が過ぎると、首飾りは彼女のものになった。[16]

このような、女神と小人あるいは工匠との関係は、インドの『ジャータカ』に見られる次の伝承と比較できるところがある。

アッジュナ、ナクラ　ビーマセーナ
ユディシュティラ及び　サハデーヴァ王
この五主のほかに　その女は
足無し小びとと　悪事犯した[17]

五人の兄弟の王と結婚したある女が、夫たちのいないすきに、両足がなく背中の曲がった召使の小人と情を通じた。これを知った夫たちは女の悪性を悟り、ヒマーラヤへ行って出家した、という話である。ここにある「その女」とは、名をカンハー（「黒い」という意）といい、『マハーバーラタ』の女主人公ドラウパディーのことである（ドラウパディーの別名「クリシュナー」は「黒い」という意味である）。ドラウパディーはパーンダヴァと総称される五人の兄弟の夫を持つが、『マハーバーラタ』においてはその貞節さを強調されている。しかし上記の『ジャータカ』説話においては、女性の不実な性を示すための話として語られている。

ドラウパディーは『マハーバーラタ』において、明確にシュリーの化身であるとされており[18]、両者は密接な関連を有するのだが、シュリーにも小人との関係が認められる。彼女は『マハーバーラタ』2, 10, 18において、クベーラ神の宮殿に住むと言われているが[19]、このクベーラは畸形の矮人であると考えられているらしい。足が三本あり、歯が六本しかないとも言われるようである。中村元氏は次のように説明する。

彼は元来地面の間隙、洞窟の中に存する精霊であったのでそのように表象されているのであろう。したがって地中は鉱床が存するために、ついに財宝福徳の神の地位にまで高められたのであろうと考えられる。[20]

バサールフ（Basārh）から出土した四、五世紀のものと思われる印章には、シュリーが財宝の袋を持った二人の小人といる図が記されている。[21] この小人はクベーラであるともヤクシャ（yakṣa）であるとも言われている。ヤクシャは中性名詞としては『リグ・ヴェーダ』にも出ていて、妖怪や神霊を指す。ウパニシャッド以降は、男性名詞でクベーラの従者である半神の一種の名を指す。ジャイスワルの指摘するように、[22] ヤクシャの王である小人の姿をしたクベーラと、シュリーとの関係が、この印章において明確に示されていると考えられる。

フレイヤが首飾りを手に入れるために身を任せたドヴェルグと呼ばれる小人たちは、スノリの「ギュルヴィの惑わし」一五章に「大地や岩の中に住んでいる」と記されている。大地の中に存するという点では、このドヴェルグたちは中村氏の説明するクベーラの姿に通じる。またドヴェルグたちはすぐれた工匠であり、神々の武器や財宝の製作者であった。クベーラにはそのような工匠としての性格は見られないが、財宝の神という彼の職能は、やはり地中の鉱床を利用して財宝を作り出す北欧の小人たちに対応する部分があるように思われる。

『オデュッセイア』でアプロディテの夫とされるヘパイストスは、「両足曲がりの神」を意味する「アンピ

ギュエエイス」という名でも呼ばれる、醜く足の曲がった工匠である。彼の仕事場はモスキュロス火山を擁するレムノス島の地下にあるとされていた。この「両足曲がりの工匠」は「小人」でこそないものの、「醜い矮人である財宝の神」クベーラや「地中に住む工匠の小人」ドヴェルグたちに近い性質を持っているように思われる。

以上にみてきたように、シュリー、アプロディテ、フレイヤはいずれも、それぞれの神界において浮気な性質を強調されており、さらに醜い姿の小人・工匠と深く関わるという奇妙な特徴を、共通して有している。

三、戦争を引き起こす女神と女主人公

インド、ギリシャ、北欧にはいずれも、神々と人間とを巻き込んだ地上における大規模な戦争についての伝承が語られている。これらの戦争において、それぞれの神界の豊穣女神が担う役割には著しい共通点が見られる。ここでは、これら三つの地域の戦争伝承における豊穣女神と、彼女たちの投影であると考えられる女主人公たちを比較し、印欧語族の戦争神話の祖形について考察したい。

吉田敦彦氏は、著書『ギリシャ神話と日本神話』の「ギリシャ神話とインド神話」において、トロヤ圏伝承と『マハーバーラタ』との間に見られるいくつかの類似のうち、特に重要と思われる二例を指摘されている。[23] 第一の類似は、戦争の発端である。失われた叙事詩『キュプリア』の断片から知られるところによれば、トロヤ戦争の発端は以下のようなものであった。

ある時あまりにも数の増えすぎた人間の重みに耐えかねた大地の女神が、その重みを軽減してくれるようにゼウスに嘆願した。ゼウスは彼女を憐れみ、まずテバイをめぐる戦争を起こして多くの人間を殺し、次に女神テティスを人間ペレウスと結婚させて英雄アキレウスを誕生させ、またゼウス自身と人間の女レダとの間に絶世の美女ヘレネを生まれさせた。そしてこの二人の主人公によって準備されたトロヤ戦争においてさらに多くの人間を殺し、大地の負担を軽減したのである。

『マハーバーラタ』に語られるクルクシェートラの大戦争も、これとほとんど同じ経緯で、最高神ブラフマーによって準備された。

地上に生まれ変わったアスラたちによって大地は生類に溢れ、この重みに耐えられなくなった大地女神はブラフマーに助けを求めた。するとブラフマーは神々に、地上に化身してアスラたちと戦い、大地の重みを軽減するように命じた。神々は、戦争の主役を演じる多くの英雄を地上に誕生させた。[24]

これら二つの神話の類似点を、吉田氏は次のように説明されている。

ギリシアのトロヤ圏伝説とインドのマハーバーラタの伝説の主題を成す、いずれも同世代の英雄たちを総

動員して戦われる雄大な規模の大戦争は、このようにギリシァにおいてもインドにおいても、増殖し過ぎた人類の重圧に苦しむ大地の女神の哀訴に心を動かされた神界の主によって、人減らしを目的として計画されたものとされている。そしてこの計画を実現するために神々がまず行なったことは、インドにおいてもギリシァにおいても、地上に降臨して人間たちの間に、来るべき大戦争において主役を演ずる神子たちを誕生させるということであった。[25]

次に吉田氏は、これらの戦争で活躍する英雄の一人であるアキレウス（ギリシャ）とビーシュマ（インド）の出生に関しても、重要な類似の見られることを指摘される。「アイギミオス」の断片には、英雄アキレウスの出生に関する次のような神話が記されているという。

人間ペレウスと海の女神テティスとの間に生まれた七番目の子が英雄アキレウスであったが、彼の六人の兄たちは生後まもなくテティスによって、水に投げ入れられて殺されていた。テティスは生まれた子が神性を備えているかどうかを見極めるためにこのようなことを行なったのだという。アキレウスが生まれた時、ペレウスはテティスのこの所業に耐えられなくなり、息子が水に投げられるのを阻止した。するとテティスは怒って海に帰っていった。

一方、『マハーバーラタ』の重要な英雄ビーシュマの誕生は、次のように語られている。

ある時八人のヴァス神はヴァシシュタ仙の怒りを買い、地上に生まれ変わらねばならないという呪いを受けた。ヴァスたちはガンガー女神に、地上に降りて自分たちの母となってくれるよう頼んだ。ガンガーがこれを承諾すると、さらにヴァスたちは、少しでも早く天界に戻れるよう、生まれたらすぐに自分たちを河に投じて殺してくれるよう、頼んだ。しかしガンガーは、彼女の地上における夫となることがすでに決められていたシャンタヌ王に、一人の子も残らないことを哀れんだ。そこでヴァスたちは、自分たち八人の一部ずつによって一人の子を作り、この子だけは殺さずに地上に残すことに決めた。地上に降りたガンガーはシャンタヌの妻となり、八人の子を産んだが、彼らが生まれるとすぐに河へ投じて天界へ帰してやった。しかし事情を知らないシャンタヌはガンガーのこの恐ろしい行いに耐えられなくなり、かつてガンガーに、彼女がどのような行いをしても決して口をはさまず、不愉快な言葉を吐かないと誓ったにもかかわらず、八人目の子が生まれた時、彼女を罵った。ここでガンガーは正体を明かし、全ての事情を語ったうえで、神々の世界へ帰っていった。八人目の子であるビーシュマはガンガーのもとで育てられた後に、シャンタヌに渡された。[26]

このように、これら二つの地域の神話には、水界の女神が人間と結婚し、生まれてくる子を次々に水中に投じて溺死させ、これを夫に咎められると怒って神界に帰り、最後の子だけが成長し英雄となるという、非常に特徴的な話根が共通して含まれている。

以上が吉田氏によって指摘された類似点であるが、この両地域の戦争伝承には、他にも重要な共通点が存在している。トロヤ戦争のためにゼウスが行なったことは、英雄を誕生させることと、戦争の原因となる美女を用意することであった。この美女がヘレネであり、パリスによって彼女が誘拐されることでトロヤ戦争が始まるのである。ヘレネの誘拐に至るまでのいきさつには、女神アプロディテが大きく関係している。それは以下のような経緯であった。

海神ネレウスの娘テティスと人間のペレウスとの結婚式が天上の神々のもとで盛大に行なわれた時、争いの女神エリスだけはこの宴会に招待されなかった。これを恨んだエリスは「最も美しい女神へ」と書いた黄金のリンゴを宴会場に放り込んだ。女神たちは争ってこのリンゴを得ようとしたが、最後にヘラとアテナとアプロディテの三女神が残り、ゼウスに審判を求めた。ゼウスは羊飼いのパリスに判定をゆだねた。

三女神はイデ山に赴き、それぞれ自分を選んだ場合の贈物をパリスに提示した。ヘラは世界の支配権を、アテナはあらゆる戦における勝利を、そしてアプロディテは最高の美女を。パリスはアプロディテを選んだ。

アプロディテはメネラオスの妻ヘレネをパリスに与えることにした。パリスは女神の手助けによってヘレネを誘拐した。これがトロヤ戦争の始まりとなった。(27)

呉氏は、「『イリアス』に現れるヘレネは、本来はやはりアプロディテ、もしくはこれに類する愛の女神で

あったかも知れない」と推測されている。[28]

『マハーバーラタ』においても、戦争の原因となるのは一人の美女ドラウパディー（クリシュナー）であった。彼女は誕生の時に、姿のない声によってそのような運命を予言されていた。

全ての女性のうちで最高のクリシュナーは、クシャトリヤに破滅をもたらす。この美しい胴の女は、やがて神々の目的を果たすだろう。彼女のために、クシャトリヤたちの大きな恐怖が生じるだろう。[29]

ここで言われている「神々の目的」とは、ブラフマーによって計画された人減らしのための戦争のことを示していると考えられる。クル族の兄弟が、生理中で一枚の衣のみを身に着けて部屋にこもっていたドラウパディーを、髪を摑んで集会所に引きずり出し、衆目の前でその衣を剝ぎ取ろうとして辱めたことが、後にクルクシェートラの戦争の原因となったのである。このドラウパディーは『マハーバーラタ』において明確にシュリーの化身であるとされており、このようなシュリーとドラウパディーの関係は、トロヤ戦争におけるアプロディテとヘレネの関係に対応すると思われる。

確かに、一方のトロヤ戦争ではヘレネの「誘拐」が戦争の原因となったことに対して、他方のドラウパディーにおいては「暴行」が戦争の原因であったという相違点がある。しかしグリンツァー（P. A. Grintser）は、暴行は誘拐の軽減された変形であると考える。彼は『マハーバーラタ』のドラウパディーへの暴行と、『ラーマーヤナ』のシーターの誘拐を、等価に扱う。[30] グリンツァーの考えに従えば、ヘレネの誘

拐とドラウパディーへの暴行もまた、同列の出来事であるとみなすことができる。

両地域の戦争伝承において活躍する英雄についても、さらに類似点を指摘することができる。ギリシャにおいて英雄アキレウスが戦争のために誕生させられたように、『マハーバーラタ』における最も重要な英雄であり、かねてからアキレウスとの類似を指摘されているアルジュナをはじめとする、パーンダヴァ五兄弟もまた、戦争において人間を殺すために地上に転生させられた。ヴィヤーサによって語られるパーンダヴァとドラウパディーの前世譚によれば、かつて五人のインドラたちはシヴァの怒りを買って、その償いとして地上に生まれ変わらなければならなくなった。この時シヴァは、インドラたちに次のように告げた。

汝らは皆、人間の女の胎内に入りなさい。そこで汝らは成し難い行為を為し、他の多くのものを死に至らしめてから、再びインドラの世界に行くだろう。自身の行為によって、かつて得ていたとても素晴らしい世界に。このように私によって告げられた全てのことが行なわれるべきである。そして他の様々な意義あることをも。(31)

こうしてシヴァの呪いによって地上に転生したインドラたちが、パーンダヴァ五兄弟であり、この時五人のインドラによって、彼らが人間に生まれ変わった時の共通の妻として指名されたのが、女神シュリーであった。

以上に取り上げたギリシャとインドの戦争伝承における共通点を整理すると、次のようになる。

① 大地女神の重荷を軽減するために、最高神によって戦争が計画される。
② アキレウスとビーシュマは、水界の女神と人間の英雄との結婚によって生まれた末の息子であり、彼らの兄たちは皆、母によって水中に投じられて殺されていた。
③ ヘレネとドラウパディーの誘拐・陵辱が戦争の原因となる。
④ 戦争の原因を作る女主人公はどちらも、それぞれの神界の豊穣女神と密接に関わる。
⑤ 戦争における最大の英雄アキレウスとアルジュナ（パーンダヴァ）は、戦場で多くの人間たちを殺すために最高神によって誕生させられた。

ギリシャとインドに伝わる一連の戦争伝承は、北欧ゲルマンの伝承とも比較することができる。フレイヤはブリージングの首飾りを得るために小人たちと交わったが、そのことが原因で彼女は、無数の勇士たちの死の原因となる大戦争を起こさなければならなくなった。このことは、『ソルリの話およびヘジンとホグニのサガ』という小サガに、以下のように語られている。

この一件（フレイヤがドヴェルグと交わり首飾りを得たこと）をロキが知り、オーディンに告げた。そしてオーディンの命によって、ロキはフレイヤから首飾りを盗んだ。ロキの仕業だろうと見当をつけたフレイヤは、オーディンの屋敷に行き、首飾りを返してくれるよう求めた。オーディンは条件を出した。「そなたは、それぞれ二十人の王が仕える二人の王を不仲にし、互いに争わせなければならない。王たちが戦って、倒れると同時に立ち上がって再び戦うという呪いと魔法を、彼らにかけるのだ。そしてこの戦い

は、勇敢な首領がこの連中を武器で殺すまで、続くのだ」。フレイヤは承知して、首飾りを受け取った。

北欧デンマークの王子ホグニと、南欧セルクランド（サラセン）の王子ヘジンが、戦争の主役に選ばれた。この戦争は、ゴンドゥルという名のフレイヤの化身にそそのかされたヘジンが、盟友ホグニから娘ヒルドを奪い、妃を殺害したという事件から始まった。両者はハー島で戦った。王たちはまさしくオーディンの言葉のように、倒れてもまた起き上がり、戦いつづけた。ヒルドは茂みに潜み、この戦いを眺めていた。戦いは百四十年間続き、ノルウェー王子の従者イーヴァルが呪われた戦士たちを皆殺しにして、ようやく終わりを迎えた。[32]

ゴンドゥルとヒルドの名は、それぞれ「（魔法の）杖をもつ女」「戦い」を意味し、「巫女の予言」30に列挙されているヴァルキュリヤの中に見られる。また、スノリの「詩語法」五十章によれば、ヒルドは夜になると、戦いで倒れた戦士たちのもとに出かけ、魔法によって彼らを起こしたという。[33] ここでは明確に、ヒルドはフレイヤの体現として描かれている。

ギリシャとインドとの間に見られた戦争伝承の共通点を、この北欧ゲルマンの伝承と照らし合わせてみると、以下の三点において、話根の一致が認められる。

① 最高神（オーディン／ゼウス／ブラフマー）が戦争を計画する。

② 豊穣の女神（フレイヤ／アプロディテ／（シュリー））が戦争の原因を作る。

③ これらの女神の投影と考えられる女主人公（ヒルド／ヘレネ／ドラウパディー）の誘拐・陵辱が戦争の

直接の原因となる。

つまりこれら三つの地域の伝承はいずれも、地上における大戦争の発端を、最高神と豊穣女神とこれの投影である女主人公という三つの段階によって説明している。ただし第二の段階で、フレイヤ・アプロディテと比較すべきシュリーにおいては、彼女自身が直接に戦争の原因を作るという神話は語られていない。しかし、戦争を起こす女神という側面は、わずかながら『リグ・ヴェーダ』の言語の女神ヴァーチュに認められる。彼女は『リグ・ヴェーダ』讃歌 10, 125, 6 において、自讃の形式で次のように謳われている。

われはルドラ（暴風雨神）のために弓を引く、〔彼〕の矢が祈禱の敵を殺さんがために。われは人間に闘争を引きおこす。われは天地に浸透す。[34]

このヴァーチュ讃歌から、インドにおいても叙事詩以前に「戦争を引き起こす女神」という観念の存在したことを知ることができる。

以上の比較から、印欧語族はその共住期においてすでに、神々と人間を巻き込んだ地上における大戦争に関する一連の神話を持っており、これがインド、ギリシャ、北欧のそれぞれの叙事詩伝承に受け継がれ、現在見られるような形に残されたものと推察することができる。

おわりに

インド、ギリシャ、北欧ゲルマンのそれぞれの神界を代表する豊穣女神として、本稿ではシュリー、アプロディテ、フレイヤの三女神を取り上げ、比較を試みた。その結果、この三女神には以下の三項目に要約されるような、非常に特徴的な性質が共通して見られることが明らかになった。

① 海から誕生する。また「海の娘」であると観念されている。

② 浮気な性質を有し、小人・工匠と交わるという側面が見られる。

③ 最高神・人間の女主人公と共に、人間のあいだに戦争を引き起こすという役割を持つ。

これらの女神のうち少なくともシュリーとアプロディテに関しては、一方はインドの非アーリヤの出自であることが明確であり、他方のアプロディテはオリエントの豊穣女神の系統に属することが知られており(注(14)参照)、両者とも元来はインド・ヨーロッパ語族の神格ではない。しかしこれらの女神がひとたび印欧語族の神話体系に組み込まれると、彼女たちには印欧語族が独自に有していた豊穣女神の性格が付与されるのである。

おそらく印欧語族はその共住期においてすでに、これら特徴的な性質の全てを備えた豊穣女神と、この女神に付随する一連の神話を有していたのであろう。これらの神話は印欧語族が各地に分散した後も正確に保持され、後に叙事詩伝承という、宗教的な制約が少なく比較的自由な表現媒体の中に、再現されるに至ったものと考えられる。

注

（1） 吉田敦彦『ギリシア神話と日本神話』みすず書房、一九七四年、六九頁。

（2） 女神シュリーに関する研究として、以下のものを参照した。Jan Gonda, *Aspects of early Viṣṇuism*, 2nd ed.(Delhi, 1969), pp. 212-231; Suvira Jaiswal, *Origine and development of Vaiṣṇavism* (New Delhi, 1981), pp. 92-115.

（3） A. H. Krappe. "The Sovereignty of Erin", *American Journal of Philology* 63 (1942): 444-54; A. K. Coomaraswamy, "On the Loathly Bride", *Speculum* 20 (1945): 391-404; A. Rees, B. Rees, *Celtic Heritage* (London, 1961), p. 75; G. Dumézil, *The Destiny of a King*, Translated by A. Hiltebeitel (Chicago, 1973), pp. 95-96; A. Hiltebeitel, *The Ritual of Battle* (Ithaca, 1976), pp. 144, 175-191.

（4） 『マハーバーラタ』1, 15-17. テキストはプーナ批判版を用いた。*The Mahābhārata*: Text as constituted in its critical edition. 5vols. Poona, 1971-1975.

（5） 吉田敦彦『水の神話』青土社、一九九九年、一七七～一七九頁。

（6） 『神統記』188-198. テキストは次のものを用いた。P. Mazon. *Hésiode*. cinquième edition. Paris, 1960.

（7） Jaiswal, *Origine and development of Vaiṣṇavism*, p. 95.

（8） 呉茂一『ギリシア神話』新装版、新潮社、一九九四年、二〇四～二〇五頁。

（9） 『マハーバーラタ』13, 81.

（10） Jan Gonda, *Aspects of early Viṣṇuism*, pp. 223-224.

（11） Jaiswal, *Origine and development of Vaiṣṇavism*, p.103.

(12) 松平千秋訳『オデュッセイア』岩波文庫、一九九四年、二〇〇～二〇五頁を参照した。

(13) 『神統記』986-991.

(14) アプロディテは、シュメールのイナンナ、バビロニアのイシュタル、フェニキアのアシュタルテのような、オリエントの大母神の系統に属する女神であると考えられている。アプロディテとアドニスやアンキセスとの恋は、これらオリエントの大母神と年若い愛人（毎年大地から芽を出しては枯れることを繰りかえす植物を象徴している）との関連に対応する。沓掛良彦訳註『ホメーロスの諸神讃歌』平凡社、一九九〇年、二七一～二七九頁。Charles Penglase, *Greek Myths and Mesopotamia* (London and New York, 1994), pp. 159-179.

(15) 菅原邦城『北欧神話』東京書籍、一九八四年、二六四～二六五頁。

(16) 菅原、前掲書、二六七～二六八頁。

(17) 中村元監修・補注『ジャータカ全集』第八巻、春秋社、一九八二年、二四六頁。

(18) 『マハーバーラタ』1, 61, 95; 2, 72, 28 など。

(19) ete ca anye ca bahavo yakṣāḥ śatasahasraśaḥ/ sadā bhagavatī ca śrīs tathā eva nalakūbarah// （そして他の多くの何百何千ものヤクシャたちがここ（クベーラの集会所 sabhā）にいる。女神シュリーとナラクーバラ（クベーラの息子）もまた、常にそこにいる）。

(20) 中村元『ヒンドゥー教と叙事詩』春秋社、一九九六年、四三九頁。

(21) *Annual report of Archaeological Survey of India*, 1903-1904, Plate XL, No. 7, 8, 13.

(22) Jaiswal, p. 102.

(23) 吉田敦彦『ギリシァ神話と日本神話』、六九～七四頁。

(24) 『マハーバーラタ』1, 64.

（25）　吉田、前掲書、七一頁。

（26）　『マハーバーラタ』1, 91-92.

（27）　呉、前掲書、六三〇～六三三頁を参照した。

（28）　呉、二一八頁。

（29）　『マハーバーラタ』1, 155, 44-45.

（30）　ドゥ・ヨング著、塚本啓祥訳『インド文化研究史論集』平楽寺書店、一九八六年、八四～八五頁。

（31）　『マハーバーラタ』1, 189, 25-26.

（32）　菅原、前掲書、二六八～二七〇頁。

（33）　菅原、二七〇頁。

（34）　辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫、一九七〇年、三〇八頁。

An Indo-European Myth Relating to the Fertility Goddess

OKITA, Mizuho

This paper deals with three fertility goddesses; Śrī, Aphrodite, Freya who belong to the pantheons of India, Greece, and Scandinavia, and tries to compare them. This comparison makes it clear that following three characteristics are common to these three goddesses.

1) They spring from the ocean, and are regarded as “the daughter of the ocean”.

2) They have a lewd character, and have love affairs with a dwarf smith or a divine manufacturer.

3) They cause a great war among the human beings.

The third is the most important point in this analysis. In India, Greece, Scandinavia, there are legends of a great war in which so many gods and human beings are involved. In my opinion, these legends have a common structure. First, the supreme god decides to bring about the war. Second, the fertility goddess becomes the origin of the war. Third, the abduction of a human heroine or the insult to her turns out to be the direct cause of the war. This heroine is regarded as an earthly incarnation of the fertility goddess.

It is likely that Proto-Indo-European society had a fertility goddess having all these characteristics, and myths related to this goddess. And each Indo-European community inherited the concept of this fertility goddess from the Proto-Indo-European mythology.

（人文科学研究科日本語日本文学専攻　博士後期課程二年）